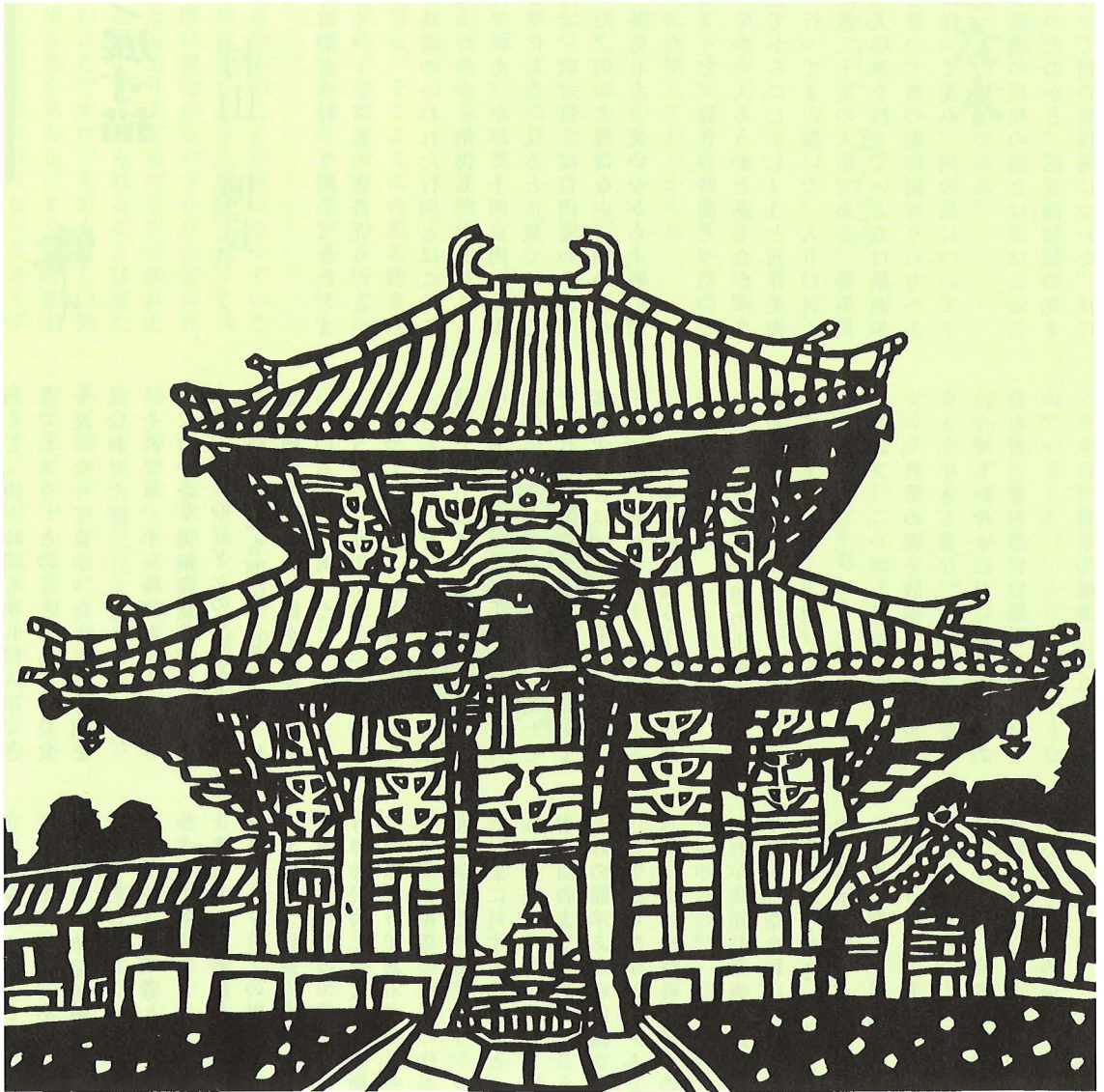


文化高知

'94年5月 NO.59



「東大寺」高知市立城西中学校3年生 北岡満 (1994年2月)

(財)高知市文化振興事業団

バーンズ・コレクション展寸描



村山 博良

この三月一日に、M副会長さんと二人で上京することになった。そこでいろいろ時間の潰し方の相談となった。

折りよく、ある結婚披露宴で、同席のM会長、N県議からぼっちりの話を伺った。つまり、バーンズ・コレクション展を見るべしとのことである。ただ、「入場するには長い行列を並ばなければならぬ。ほんとうは午後に行ったら割にすいちゅう。それにしてもあまり見事なのでわたしも三回繰り返しみてきた」とのN県議のお話であった。

特に絵画に造詣が深いわけでもなく、ましてや、この機を外したら一生見えんと言われてもそれほど惜しさがあるわけでもなし、まあ時間潰しよ、と、当日上野駅へ降り立った。階段を上りコンコースへ出て驚いた。改札口の手前に長蛇の列が出てきているではないか。何やら駅員がマイク片手に案内している。M副会

長さんが前へ行って聞いてきた。まさしくバーンズ展の切符売りだという。

N県議のいわれた行列とはこのことだったのかと納得しておとなしく並んでいた。やがて千四百円で入場券を手にした。見ると正規では千五百円で、駅で買えば百円安いわけがあった。何のことはない百円のため一苦労したと笑いながら上野公園に入った。

ちょうど、昼食の時間だったので、食べてから入ろうかと話したが、まあ見てから入らうかと話したが、美術館へ行ってもまた驚いた。入り口付近は十重二十重の人垣である。警備員が「入場券を持っている方は横断歩道を渡って奥の動物園寄りの方へ矢印に従って進み、列の後について下さい」との指示である。

N県議の長蛇の列とは実はこのことだったのかと、国立博物館の先まで行って列の最後尾についていた。係に

聞くと「約一時間もすれば入館できるでしょう」とのことである。昼食を食べなくて良かったと二人で顔を見合わせた。

それでも、小一時間もせずに入り口に着いた。美術館全体が工事中と、前で、前庭のロダンの「考えるひと」のブロンズ像も囲いで見えぬ、「地獄の門」も上方の一部が僅かにのぞいているだけであった。

ようやく、展示室に入ったが、またびつくり。人ごみと人いきれでむんむんする。せっかくの絵は人の頭越して下方はよく見えない。高く掲げているもの以外は手元のリストと絵の脇にある番号とを照らしあわせてそれと知る有り様で、落ち着いて鑑賞するとはいえない混雑であった。

それでも、われわれディレッタントにとっても印象に残る作品が多かった。 「イポールの浜辺の少年」 「横たわる裸婦」 ルノワール 「アトリエ舟」 モネ 「カード遊びをする人たち」 「サント・ヴィクトワール山」 セザンヌ 「ハエレ・パペ」 ゴッガ 「熱帯の森を散歩する女」 ルン 「生きる喜び」 マティス など

は今でも鮮やかに目に浮かぶ。その量と質と多彩さには驚嘆のほかはない。

立者アルバート・C・バーンズ氏は医師で生化学者であり、銀軟膏「アルジロール」の発明製造で財をなし、こうしたコレクションが可能となったそう、同業者としては羨ましいかぎりであった。

感心したことはもう一つある。フィラデルフィアの財団の展示室では、ピカソの「男性の頭部」や「女性の頭部」がアフリカの黒人彫刻やアメリカの民俗工芸と同じ壁面に飾られているそうである。それぞれのモチーフ別に複数の作家の作品が並べて展示されているという。つまり、同じ対象に対する作家のとらえ方、民族間の差、文化の違いを際立たせる切り口のようなのである。こうした視点からの展示あるいは鑑賞方法は寡聞にして知らなかった。ふと、やはりバーンズは自然科学者なのだなとの思いがした。

わが高知県立美術館でも、シャガールの「空を駆けるロバ」と絵金の「良弁杉」あるいは小楠の花鳥画、中国の水墨画などを並べて鑑賞できればまた楽しい展覧会となりはしないだろうか、素人の不謹慎なたわごとであるうか。

おかげで、時間も潰れ、会議も無事終わり、思いがけず楽しい充実したお上りさんの一日であった。

(高知市医師会長)

靴を履いた大きな木

ほし みなみ

横なぐりの雨、吹き荒れる風、久しぶりに実感する「台風」の近づく中、所用のため友人二人と車で市街地から少し離れた建物に向かっています。

二年前の夏、高知の木々が新緑から濃い緑に変わった時、その年初めの台風がやってきました。

駐車場から建物までは、ゆるやかな登り坂になっており、道の片側に等間隔に背の高い木が、緑いっばいの葉をつけ、風の中でけなげに立っていました。

友人二人がよるけるように建物に入り、暗い雲と風に揺れる木々の中、私ひとり残り残された時、ゴトという音とともにメシッと鈍い音がして、街路樹の一本が折れ、緑の葉いっばいの木の梢は道に激しくたたきつけられました。

それは、せつないほど痛々しい姿で、思わず私は木にかけ寄り、

「あなたが、こんなにも美しい葉をつけて、今を盛りと生きていたことを、私が憶えておくからね」と、周りに人のいないこともあって声に出して木を慰めると、この木の臨終に立ち会ったような厳かな気持ちになりました。

雨も風もさらに激しくなり、後ろ髪を引かれる思いで建物に走りました。

翌日は、そこここに台風の跡を残しながら、空はまっ青という子ども頃何度も経験した風景がありました。

昨日の木のことを気になっていた私が早起きしてその場所に行くと、木は既に根元からバツサリと切られ跡かたもありませんでした。折れた木は危険です。切られることは当たり前前のことですが、とても悲しい気分分で切り株を見ると、まっ白に見える切り株のそばに粉になった木くず

と、手のひらほどの切れ端が三つ落ちていました。いかにも無念そうなきるからね」と、三つの切れ端をハンカチに包み、

「大阪に行こうね。折れたから大阪に行けるんだからね。大阪見物しよう」と、その日は遠くの人影を意識して心の中で言いました。



ほし みなみ

大阪に着いた三つの木の切れ端は、茶封筒にマジックで、「大事な木」と書いて、ポルシェと名前をつけた私の愛自転車の前の籠に乗り、大阪城・御堂筋・中之島公園等々、いろんな所に一緒に行きました。最近、茶封筒がポロポロになったので、そのままビニールの袋の中に入れてあります。私が高知に帰る時は、この

ビニール袋に入った切れ端も旅行バックの中に入れて帰ります。

昨年のちょうど今頃、一緒に帰った切れ端を、元の切り株の上のせ、記念写真を撮ろうとした時、切り株の横から新しい芽が何本も出ているのに気がつきました。切り株は生きていたのです、もううれしくて写真を撮りまくって、「ありがとう」とだれに言うでもなく何度も言いました。

でも、台風はまたやって来ます。「もしあの時この木が動いたら、こんなことにならなかったのに」と切り株の横にすわって考えていると、「靴を履いた大きな木」というタイトルが浮かび、スーとなんの苦もなく木を動かすストーリーが出来ました。

いつも持ち歩いているノートにあらずじを書く、

「あなたの分まで生きるからね」といつものような、いい加減な約束をしたことの責任が果たせそうな気がしてホッとしました。

しばらくして、大阪の友人に子どもたちのための人形劇の台本を頼まれ、迷わず「靴を履いた大きな木」を書くことにしました。

どうやら私は、ふるさと高知から三つの木の切れ端と、「物語」を一つプレゼントされたようです。

(メルヘン・コーディネーター)

都市の表現を性能から感性へ

伊藤 憲介

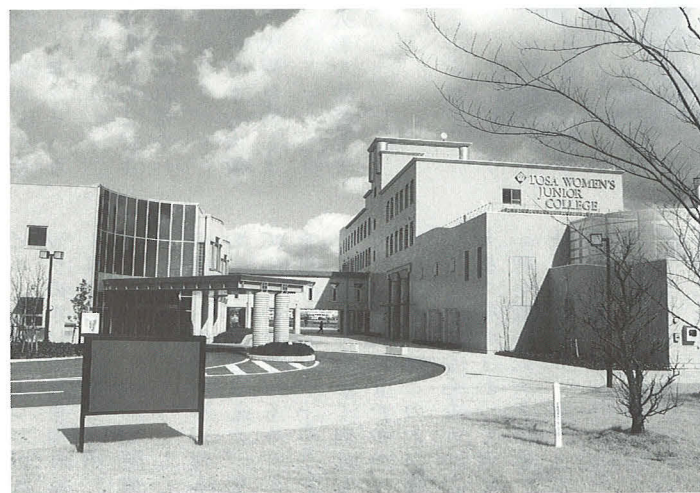
高知市都市美デザイン賞は、今回で第十回となる。ここで改めて「都市美」の意味について考えてみたい。都市における建築物等は、公共・民間にかかわらず原則的にはそれぞれの場所（環境）において恣意的に個別的な理由にして（建築の自由として）建設されるが、結果その建築の表情については、都市の時間軸において発現されるアイデンティティーをどう評価すべきかという問題になる。

この都市美デザイン賞では、建築の持つ審美性を強調することに期待しているのではなく、風水的な地域文化としての都市美を評価しようとするものである。その場合、建築単体での方法論には限界があり、そのことは全国的にも群としてのまちづくり論、すなわち、建築群を中心とした都市空間に、象徴的な秩序を求める傾向が顕著となっている。その意味で、この都市を構成する建築を含めた総ての施設の有り様は、新設

やりリニューアルするとき常に都市環境に対し明確な意志（デザインコンセプト）をもって計画し、構成していく社会システム（ある意味での行政的な誘導化）が必要な時代となっている。それが第十回という区切りでの認識である。その意味で私見であるが、十一回以降では大規模な公共建築での優位性（社会性が強いという）で顕彰するのではなく、小規模なものでも地域環境を先導するものについて



高知市保健福祉センター



土佐女子短期大学

て、部門賞的に評価することも必要ではないかと思われる。

さて、今回の推薦件数は39件（推薦対象は31件）であり、それぞれが個性的で、また地域環境に対しての主張もあり選考は難航した。各選考委員による現地調査と議論の結果、入賞として、「高知市保健福祉センター」「土佐女子短期大学」および「トップワン四国」の3件が選ばれた。

***高知市保健福祉センター**

発注者・高知市

設計者・株式会社M A設計事務所
都市の地域施設として保健・高齢者福祉・コミュニティセンターを複合しており、用途的にも地域的シンボル性の高い建築である。

ここは周辺が低層型の住宅地ということもあり、施設規模の割に南側での高さを抑え、かつ、既存の桜と楠などの植生を意識的に残すことによりエコロジカルな建築景観を創出し、また、狭い街路空間に対しモニュメントのあるポケットパークを配するなどして地域環境を演出している。建築はメタリックなアルミと石材の対比でモダンな明るい印象を与え、さらに複合する各施設部分へのアクセスマンが分かりやすく、建築の完成度とともに市民施設としての象徴性が評価された。

***土佐女子短期大学**

発注者・学校法人土佐女子学園

設計者・株式会社教育施設研究所
田園地帯のなかにあるこの学園は、デザインコンセプトとして古典を引用した柱や窓の形が、奔放でダイナミックな表情となっており印象的である。また、外壁タイルのピンク調の色彩も若々しい魅力的な雰囲気醸し出している。

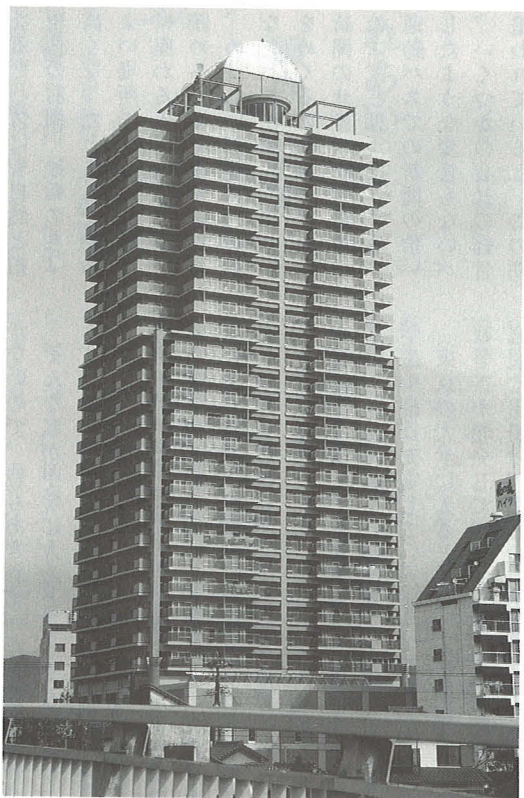
しかし、ここは最近に宅地化された地域であり、周辺環境が景観的に熟成していないこともあり、イメージとして弱い。ここでは、景観を造る樹木を配置する（たとえばアクセス道に季節感のある並木）などにより、自然と建築が調和したシンボリックでアイデンティティーのある学園環境の創出を、可能性として期待したい。

***トップワン四国**

発注者・高知県住宅供給公社、

鹿島建設株式会社

設計者・鹿島建設株式会社
超高層建築が高知にあさわしいかどうかは評価の分かれるところだが、ここでは九反田という地理的条件を生かし、鏡川岸やアクセスする道路からのシークエンスとしてランドマークとなるシンボル性の高い建築である。これが、一般的な高層建築に



トップワン四国

有りがちな壁状の威圧的な圧迫感を消しており、さらに建築のセットバック部を公開空地として計画的に周辺環境に対しても開放しながら、西側の児童公園の成長した樹木の植生群とも調和させている。建築も淡い色調と軽快なデザインにより、全体的にソフトなイメージとなっている。

***その他**

今回の入賞は3件とも建築物であったが、この賞は建築物以外の都市施設も対象としており、それらについても毎年興味ある推薦がある。今回は入賞とならなかったが、話題となったものに「地球33番地モニュメントと棧橋」と「鏡川みどりの広場

前の石組」がある。これは江の口川と鏡川（両河川とも高知市のシンボル）に関しての親水施設であるが、地球33番地は心的シンボルとしてユニークである。それが江の口川の中に当たることで二つの意味を持っているが、一市民としても江の口川の浄化とともに一文橋とその周辺の環境整備（川と一体となった橋や楠や藁工品倉庫群の風景）に期待したい。また、鏡川の石組は、環境論として指摘されている近自然工法の試みであるが、現在のコンクリート化された河川が、自然生態系に組み込まれ、緑豊かな山と一体となった河川風景が復活することに期待したい。（こうちアールヴィル構想研究会委員）

朝の準備運動

秋山 重晴



パグという中国系の小型犬を飼っている。鼻は低く、目は丸く愛嬌のある顔つきである。犬の習性はこわいもので、朝晩の散歩がいつの間にか定刻化してしまった。朝、夕の六時、雨の日も風の日も時間がずれると悲鳴をあげてうるさい。

冬の朝六時はまだ真つ暗。懐中電灯をさげて散歩に出る。パグ君には失礼だが、わが家の同類は非常に運動神経が鈍い。先日小川に転落した。暗くなって散歩に連れ出し、小川のほとりで排泄物を拾おうと網を離したらドボンと音がして姿が見えなくなった。懐中電灯を照らすと必死に川面でもがいている。猿も木から落ちるといのが、四つ足の犬も踏み外すことがあるらしい。こんな犬の散歩で一日が始まる。もっとも、天気の良い日や夕方は家人が面倒をみてくれるので、気が向いたときのウォーミングアップみたいなものである。

散歩がすむと朝風呂。これが二十数年来の習慣となっている。晩酌のせいなのである。

もう、随分むかし、友人と温泉旅行に招かれたとき、宴会でたか酔った揚句、せっかくな

の温泉旅行だからと大浴場に入った。部屋に帰ると友人がひどく心配して、深酒後の入浴は絶対やめろ！と厳しく忠告された。彼の知人が旅先で急死した直接の原因が飲酒後の入浴だったのである。以来、晩酌を絶やさぬ代わり入浴は朝にずれ込むことになった。夏も、冬も……

朝風呂はいいものである。雑念を払ってゆったり湯舟にひたる。そのうち、きょう一日のスケジュールを思い浮かべる。あれこれ思いめぐらしているうち、足の指先まで血液が循環するような気分になる。少々の宿酔いなどすっかり吹き飛んでしまう。

これから朝の出勤だ。団地のバス停に向かう。ラッシュを少しすぎたせいか、この時間帯だけエアポケットのようにバスは空いている。このバス通勤も二十四年目。車窓の風景も、乗客の顔ぶれも変わってしまった。私など最古参組だろう。これだけ古顔になるとバスにも自然と指定席ができる。私は車体の右側、後輪のちよろど上の、座席が一段高くなったところである。新聞を読むのに都合がよい場所である。座席の膝が窮屈なせいか、隣に座わる人は減多にない。お蔭でゆっくり新聞が読める。はりまや橋で下車するまで三十五分間、めぼしい記事は大体拾い読みできる。雨の日などバスが混んで隣り座席がふさがると、新聞をめくるのがはばかられる。このときだけは、新聞のサイズが今の半分ぐらいがちょうどいいのに、と思ったりする。

犬の散歩、朝風呂、通勤バスでの新聞の拾い読み。毎日、判こを押したような変哲もないパターンの繰り返しだが、いくつかの会社の経営を掛け持ちし、雑務に追われていると、この朝

知れない。

(つちばし薬局)

友・家族、ふれあい

岡内 啓明



会社での朝礼が終わり、来客を待つて喫茶で一服している私に、文化振興事業団より「忙中閑あり」というテーマで原稿依頼がありました。絶妙のタイミングです。

しかし、書き始めて見ると、今の私にとって最も難しいテーマだと思ひ知りました。というの「忙」とか「閑」とかいう気持ちがあつた薄いとということ。年齢的にも四十五歳、本業に打ち込む最適の時ですし、また京セラの稲盛和夫氏の警咳に接する中で、自らの生き様、考え方が大きく変化してきたことに原因があるように思います。

宿命として、継承発展すべき会社、また社員全員の物心両面の幸せの達成、このために改めて会社の存在目的を明確にし、具体的に達成する目標をも設定しました。そのことを潜在意識に透徹する程の願望として思っていますし、自らの全人格の投影だと考えています。ですから、時間という観点では「忙」ということはありますが、精神的には常に喜々として

の準備運動？が限りなく有用に思えてくる。

(高知新聞社)

孫たちとの時間こそ

藤原 定子



「忙中閑あり」で書けと言われた時、正直いって困ってしまった。現在の私は忙中閑の言葉が見当たらない。子供の頃はとてもおんびり屋で、学校の帰りに川の中で泳ぐゲンゴロいや小さな虫、ゆれる藻などが面白くて何時間でも動かないので、親もあきれていたと話していた。

そんな私が中学に入ると驚くように変わってしまった。バスケット部に入り大活躍、声も大きくて応援団長を頼まれたりもした。その上、弓道も始めた。「静中動」、静の中ですべてのエネルギーが一瞬に集結する爆発力。外のスポーツと全く異なった雰囲気魅せられて尊敬する先生の道場に寄り、学校の帰り練習に励んだ。

また学級では先生に頼まれていろいろと人のお世話をすることも多くなり、学校全体行事にも指名され代表として出される機会も増えて、学生生活は充実していた。

東京の大学に入るとちよろど支那事変(日中戦争)が勃発して、日曜など友人と陸軍病院に慰問に出掛け、また少しの間をつくって弓道も

切り開いていくべき立命に取り組んでいることであり、「忙」という感じが薄い訳です。

今、私にとって最も楽しいことが仕事ですが、あえて「閑」をあげるとすると、切磋琢磨できる友人とうまい酒を飲む時と、家族とのふれあいとサウナで汗を流す時でしょうか。

以前、青年会議所運動に没頭した後、その反動で二年くらい、磯づりに熱中しました。この時はいかにして「閑」をつくるか一生懸命でした。磯づりの前日は、仕掛けづくりに胸をときめかし、子供の頃の遠足とまったく同じです。仕事中でも、あの大海原に糸をたれる自分を思うと、しよつちゅう行きたくて、人の十年分くらい、つりに行ったことでした。

どうやら、本当にやりたいことが出来ること、「忙中閑あり」ではなく、「閑中閑あり」になつてしまいがちです。過去にも学生時代を含め、いくつものことに没頭した体験がありますが、世の中で、最も面白いことの一つが会社経営だと思ひます。社員一人ひとりとの一体感、心のふれあい、仕事の確実な進歩、目に見える結果としての数字、こうしたことを自らが本気で努力すればするほど、願えば願うほどその通りになります。人目には、大変な苦勞にうつるかもしれませんが、これほど多くの喜びを与えてくれることはないと思ひます。忙中閑ありの結果しか出ないと思ひます。「忙中閑あり」の「閑」を、心の楽しくたゆたう領域とすると、今、いつも閑です。

続けたが、好きだった声学も習い始め生活を充実させていた。昭和十六年大学を出て市民病院に勤務したが、仲間を集め高知歌謡楽団という慰問団をつくり、土、日は陸海軍を慰問に回ったり、物資の少ない時だったが故郷を離れて来ている将校さんたちを家に呼んで、ご馳走を作つて喜んでもらつたりもした。

その後子どもが四人となり開業。仕事、家庭、母親と大変な時期に国体に出場してほしいと再三の頼み。「四国で優勝せねば国体に出られないので困っている」と。再び弓を始めることになったが時間がとれぬので、夕食後子どもたちが夜の勉強を始めると心ばかりのおやつを置いて出掛けた。夜九時、十時、疲れに打ち勝つ気で練習したことが本番で力を発揮、以後十数年国体に出場、優勝と入賞を続けたが、その四十代にきたえたパワーが今の私のめっちゃめっちゃに忙しい生活に耐える原動力になっているように思う。振り返つてみてほとんど私の行動は人が喜んで下さるならとの気持ちで始まつていたので、ここまで出来たのかなとも思う。

今わが家の家事は朝が私、夜は娘の当番という形で動いている。皆が出掛けたあと、追うように出掛ける。定年無き自分の仕事と県弓道連盟会長、市商工会議所婦人部会長、薬剤師会副会長、環境衛生・福祉・体協・国保関係ほか種々の委員、また高知大や女子大での弓道の師範など、かけ持ちで思つく間もないような毎日であるけれど、日曜日が半日でも空くと六人の小さな孫たちと泳いだり、自転車に乗りに行ったり、ボール遊びをして思ひきりさわぎ笑う。これが私の明日への活力となり唯一の「閑」かも

(楸丸三)

雪蹊寺の仏像

前田 和男

雪蹊寺は、高知市長浜にある臨済宗妙心寺派の寺院で四国霊場八十八ヶ所第三三番札所である。延暦年間(七八二〜八〇六)空海の開創にかかる真言宗寺院であったと伝えられるが、確かな資料があるわけではない。『土佐国古文叢』などにみえる鐘銘(現存せず)に「土州高福寺撞

鐘大願主越智氏、当寺建立本願主刀阿念生靈、俗名父生大仲臣福光奉寸増鐘撞也、檀那右近将監定光 嘉禄元乙酉歳十二月五日鑄之」とあるところから、雪蹊寺の前身高福寺が嘉禄元年(一二二五)建立されたものと考えられている。天正十二年(一五八四)の棟札には「高福山慶雲禪

寺」とあり、天正十六年の『長浜村地検帳』に「慶雲寺堂床」とあるので寺号が高福寺から慶雲寺に変わったことがわかり、「禪寺」禪宗寺院であったこともわかる。その後慶長四年(一五九九)長宗我部元親が没すると慶雲寺は長宗我部氏の菩提寺となり、寺号も元親の法号雪蹊恕三

寺」とあり、天正十六年の『長浜村地検帳』に「慶雲寺堂床」とあるので寺号が高福寺から慶雲寺に変わったことがわかり、「禪寺」禪宗寺院であったこともわかる。その後慶長四年(一五九九)長宗我部元親が没すると慶雲寺は長宗我部氏の菩提寺となり、寺号も元親の法号雪蹊恕三



薬師如来坐像



十二神将4号像



毘沙門天立像

表現形式とその彫り口など、すつきりとした美しい姿をみせており、三尊そろって慶派仏師による鎌倉初期の代表的な作例といえよう。

本尊の守護神としてつくられた十二神将立像は、残念ながら二軀を欠くが、地方仏師の手になるものであることが一目で分かる作品である。像高八三・三〇八・八センチ、ヒノキの寄木造、玉眼、彩色の像で、

十軀のうち九軀の胎内に銘があつて、文永十一年(一二七四)から建治二年(一二七六)にかけて「佛師筑後工海覺」によってつくられたことが分かる。上半身の動きに強いものがあり、それぞれの動きに変化を与え、独特の風貌をみせている。両手を失うもの、片手を失うもの、持物もすべて失われていて、銘文中に尊名のある四軀をのぞいて各像の名称は決

め難い。十三世紀後半の地方仏師の動向の一端を知ることのできる遺品として貴重である。

雪蹊寺には、毘沙門天立像に吉祥天立像と善膩師童子立像が脇侍として従う三尊像があり、大正七年(一九一八)の修理の際、毘沙門天の左足枵に

中尊一鉢
并吉祥天女禅尼
師童子
以上三尊

法印大和尚位湛慶
□□也

の墨書銘が発見され、以来湛慶在銘像として知られるようになった。湛慶は鎌倉前期を代表する仏師運慶の長男で、銘文中にみえる法印に叙せられたのは建保元年(一一二二)、

四十一歳の時であり、前記の如く雪蹊寺の前身高福寺が建立されたと考えられる嘉禄元年頃に制作されたものと思われる。三尊ともヒノキの寄木造、玉眼、彩色の像で、像高は毘沙門天が一六八・〇センチ、吉祥天七九・七センチ、善膩師童子七一・二センチである。毘沙門天は胃はかぶらぬが、身に鎧をつけ、腰をわずかに左にひねり、右足を一步ふみだして邪鬼の上に立つ。いま両手を失っているため当初の形姿を明らかにできないが、右手に鉢をとり、左手に宝塔をささげる形ではなかったかと思われる。凛々しい目鼻立ちを刻み、充実した体幹部の肉付けも的確で、洗練された写実的表現をみせ、

気魄に充ちた武将を思わせるものがある。吉祥天は宋風の太袖の着衣をつけ、腰を左にひねって荷葉座の上に立つ。腹を前につき出したやや不自然な姿態をとりながら、理知的な美しさをみせている。善膩師童子はやや首をかしげ、軽く腰を折り、中尊を見上げた愛くるしい表情をみせる。三尊それぞれに彫り口をかえ、中尊

に対して吉祥天、善膩師童子を小さくひかえめにつくって、巧みな三尊構成をみせている。

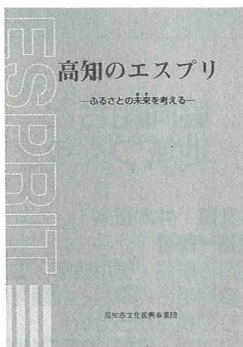
雪蹊寺の諸像は、まさに土佐の鎌倉時代を代表する遺品といえよう。(高知県文化財保護審議会委員)

高知のエスプリ

—ふるさとの未来を考える—
A 5判・160頁・定価1,200円(税込)

「文化高知」の創刊号から50号までの巻頭頁をまとめた書。こうして一書にまとめると、それぞれの文章が機関誌掲載時とはちがった感動をよぶとともに、底流にあって響きあうものが、重い説得力となっていることを教えられます。

好評発売中!



流路訪作(三)

近郊・遠郊の老舗

山岡 浩

鵬翼大洋を望む土佐の容姿。その中軸地点が浦戸湾六キロの入り江となり、北部山系の裾に迫る。源を土佐山村に発し鏡村を流下する鏡川は、その三キロの流路を浦戸湾に注ぎ、国府川等々と河口複合三角洲の沃野を形成する。築城、やがて城下町高知となり、そこに近郊農業興り今日に至る。さらに、浦戸湾口種崎の藩船基地が、農作文化伝来の拠点となり、此所砂丘一粒の化育が、本県遠郊農業にその道を拓く。

城下町草創期、寛永六年(一六二九)納屋堀に限り食料品の取引が許され、これが問屋営業の市場となり継承、今日の高知市中央卸売市場に発展してきた。

次いで元禄三年(一六九〇)、定期的街路市創設があり、爾來里が街に結ぶ庶民の露天市として賑わいて発展、現在の曜日となる。殊に追手筋の日曜市は全国に著名。

躍進する県都高知市。潤いと安らぎの街として、農業との調和を原点に据える。周辺から都心をも含む農業形態が、いわゆる近郊農業の範疇として、市民住域での農産物の場が形成され、互いに顔を寄せ合う身近な信頼を基調に、新鮮・良質・品目多彩の特質を具備する近郊農業として発達してきた。

潮江カブ(水菜)・下知葱・比島蓮根は既に一昔前になるが、城下町周辺は四季切れ目ない豊かな自然味の宝庫。なかに五台山の李・針木の新高梨・円行寺のサツキ・福井の鉢花・徳谷のトマト等、それに早場米があつて多種彩々。

北麓の赤土・河岸帯の砂質土は、根菜・葉菜・果菜類の伝統産地であり、曜日への出荷農家が多い。その戸毎の週単出荷には、わが家の季節別産出設計が描かれ、個別経営の総力が籠もり、多角多面・木目細やかな営農体系で、農産加工をも含め年間皆勤に励む。街路市は不特定多数の顧客ながら、産品を介して街と里の人間模様を織り成し尊い。

露地ものから発展した雨除施設栽培が、若手専業農家層の栽培型として市街化区域を含め活気がある。主にホールソウ・菊菜・山東白菜等の軟弱もので、五・六回転の集約栽培。洗根に緑葉の調和が冴え平東の結びにも年が宿り、地場市場の誇る伝統特産の一つ。

上流の「鏡ダム」は県都の水瓶。ここ土佐山村・鏡村は、茗荷・生姜・柚子・梅の特産で知られ夏場の冷涼性をも生かし、得意な近郊産品群が豊富。集落起点の定期便があつて日々高知卸売市場に出荷、水瓶とともに上流域の風味を市民に届ける。

鏡川流域圏に抱える高知市近郊農業は、さらに東西広域化となり発展する。

浦戸湾口の東端に大平山(一四二メートル)を仰ぐ。大洋の荒磯たりし立地が、河川増水と海流の織り成す千砂堆積が成長を続け、見事な砂丘帯を成し渺望たる波濤に臨む。

大平山に北風を遮り、暖流の潮風を迎える海岸砂丘は、夏場海風の発達が最高気温を抑え、晩秋から春先に至る最低気温は高知より二度程度高く、南国土佐・海の玄関に相応しい気象環境にある。

藩政期、湾口種崎は藩船根拠地の要衝に在った。

寛政十一年(一七九九)藩主参勤の帰路、大阪からの御座船が時化にて堺港に停泊。この船の水師幾之丞、当地の百姓久米右衛門から胡瓜種を授かりて、これを種崎に栽培。この由来が土佐野菜園芸の起源となる。

以後、安政年間(一八五四〜一八五九)種崎に胡瓜の広がりを伝え、明治元年(一八六八年)茄子が種崎から仁井田に及ぶ。同三十三年種崎に温床技法の導入があつて、早播き早採りの栽培気運を加速。

なかでも三十八年の塩専売制は、専業漁家製塩業の新たな殖産として、促成野菜栽培への転換を促進した。四十年、仁井田胡瓜が阪神市場に

名声を博し、四十五年には産業組合法による仁井田販売組合設立となり園芸野菜の協同出荷となる。

籠詰めし荷を牛車に、巡航船の着場から地船で棧橋に送り阪神航路輸送とした。都市の勃興が早場産品の需要を高め、海運の利便が遠隔僻地をして、近郊主体たりし市場に遠郊産地個々の地歩を形成する。

大正から昭和初期の温床栽培は、作床の高さ南五寸・北一尺五寸で六尺幅。四隅と要所に杭、周囲の枠は板と藁で三尺×六尺の油障子架け。床地を掘り下げ藁などの酸酵材を入れ、堆積肥土を床土に置き、床面を地表より低くして天地を創り、温床群の北と東西を柴囲いとしたり。

昭和期に入り、片屋根の油障子が両屋根温床へと進み、棟の直下を掘り下げて屈む姿勢の作業空間を生む。播種が一月に繰り上がり、苗床で二回移植、本葉四〜五枚の定植。床外に溢れる頃が暖候期で、この時点で障子を取り露天栽培に移る。

砂丘の種崎・仁井田と内陸の池かななる三里地区の園芸は、胡瓜主体



砂丘の花・グロリオーサ

の茄子・トマト・西瓜栽培。連作障害避け露地の石川芋・豌豆・菜豆など輪作慣行の妙味が在った。この砂丘帯、不思議に伏流水に恵まれ、畑井戸に釣瓶汲む灌水慣行があつた。水桶を天秤に担い、小走りつつ桶底からのカラクリ散水を編み出す。炎天下の熱砂に、体力の限りを尽くしそこに促成園芸の至芸を産む。

浦戸湾を東に三里・十市・三和・前ノ浜・吉川・赤岡・唐ノ浜・生見・西に長浜・宇佐・興津・入野・下田・大岐等に、本県海岸砂丘が分布する。

藩政に興る砂丘種崎の園芸は、近隣近傍に及びつつ東西に転播。昭和十年代には、これら砂丘を含む海岸線とその内陸部に亘る広大な園芸産地が形成されていった。

6. 協同組合と地域づくり

鈴木文薫・井本正人・関根猪一郎著
高知市の農協・信用金庫・生協など、協同組合の現状と課題を地域づくりの視点から分析。
A 5・136頁 定価1,000円(税込)

5. 高知県の工業

清遠幸男著
高知県の工業と技術に関し、その歴史と各業種の主要企業の概要を紹介することで、高知の第2次産業の全体像を示す。
A 5・112頁 定価1,000円(税込)



『日本原色カメムシ図鑑』など三点

審査を担当して

中内 光昭

第四回の高知出版学術賞の審査が池川順子、今井嘉彦、紫藤貞美、西島芳子、依光貫之、それに私の六名によって行われました。委員長は私が務めさせていただきましたので、審査の経過を簡単にご報告いたします。

ここ一、二年、応募点数はやや下降気味でしたが、今回は三十九点の応募があり、内容的にも大変充実してきました。

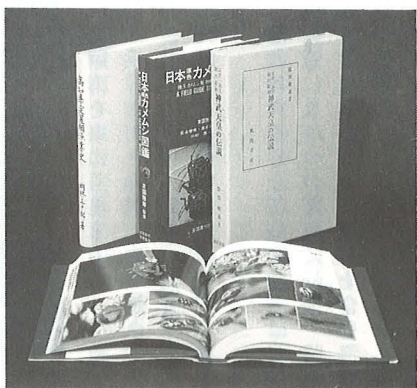
今回の応募作品のうち十編は、特定の人物をテーマにした研究で、自然科学関係も七編と比較的多く、歴史学関係が六編、教育学関連四編などがこれに続きます。

本年は第一回の会議で十六点の候補作品を選び、それらを複数の委員が精読後、第二回の会議に臨みました。個々の作品に対する評価は委員間でかなり異なる場合もありましたが、最終的には全委員一致で以下の

三点が授賞作品に選出されました。それらのうち、はじめから全委員の注目を集めたのは、川澤哲夫氏他による『日本原色カメムシ図鑑』

(全国農村教育協会・東京)でした。本書では、日本産のカメムシ三百五十余種が、野外の生態写真を使って、解説されています。多くの人はこの本を見てカルチャーショックを受けるに違いありません。カメムシがあたかも宝石のように美しいものであるなどとは、一般人の常識ではとても考えられないからです。

もちろん美しいから授賞したのではありません。本書の写真には各々の種の生時の色彩や生態が正確に記録されており、多くの新しい知見が含まれております。この点が通常の図鑑類と大いに異なる点で、本書が高く評価された理由でもあります。著者五名中四名が本県在住で、本県にとって誇るべき出版物と言えまし



よう。

岡林正十郎氏著『高知県定置網漁業史』(私家版)は、漁村に生まれて自ら漁業に従事し、大学卒業後は県の職員として水産行政の第一線にあった著者が、定年退職後のライフワークとしてまとめたものです。大変な労作で、体験に基づく具体的な知識と、行政に携わる中で培われた広い視野と識見が十分に生かされています。本県の定置網漁業がいかにして誕生し成長しどのような問題を抱えているかを、古老に話を聞いたり、埋もれた資料を発掘したりすることにより、明らかにしています。この著者の特異な経歴あってこそこの書が可能であり、今後類書の出現は難しいとの評価を受けました。

廣畑輔雄氏による『万世一系王朝

ふるすとは

堀内 豊

ものは考えようというが、「ふるさと」と仮名で書くと、幼少年時代の、のどかな風光の中で体験したイメージが展開するが、漢字で「故郷」「郷里」と書くと、成人してから、ときたま思いたす出生の地、という概念しか私には浮かんでこない。

作家の坂口安吾は、「ふるさととは語ることなし」と、突き放した言い方をしている。これは、昭和三十年頃に新潟出身の安吾が、新潟の人から頼まれて色紙に書いた文句である。さて話は変わるが、昭和十七年といえ、戦前(中)派の誰も彼もが、鉄の鍋蓋を頭からかぶせられたような、息苦しいイヤな時代に、安吾は、「日本文化私観」に、こんな辛辣なことを書いている。

「俗なる人は俗に、小なる人は小に、俗なるまま小なるままの各々の悲願をまっとうに生きる姿がなつかしい。芸術も亦そうである。まっとうでなければならぬ。寺があつて、後に、坊主があるのではなく、坊主があつて、寺があるのだ。寺がなくとも、良寛は存在する。若し、我々に仏教が必要ならば、それは坊主が必要なので、寺が必要なのではないのである。京都や奈良の古い寺がみんな焼けても、日本の伝統は微動もしない。―後略」

右の文中で、「まっとうに生きる姿がなつかしい」のカテゴリーで、良寛をとらえていることはまことに興味がある。

ハッキリ言って、安吾が良寛に触れたことで、ちよっぴり郷土意識をのぞかせた、とは思わない。むしろ越後の風土を抜きにして、良寛その人に魅力を感じたことを、表明したといえる。「寺がなくとも、良寛は存在する」と、さわやかに断言はばからなかったのは、良寛最良が作用していたとみる。

実は安吾の先祖は、良寛が国上山の五合庵にいた頃に、いちど会っている。その名は、大安寺(現在の新津市)で医者をしていた坂口文仲である。ふたりが会って歓談したのは文化十三年(一一八六)の夏で、文仲は帰宅して家人に、「ありや、ナマダサ坊主だぜ」と、言ったというところを、安吾の父、坂口仁一郎(号は五峰、元新潟新聞社社長)が、自著の「北越詩話」に書いている。

だから安吾は、父の著書で、文仲の前記の挿話を知らうし、またいろいろな良寛本をあさって、良寛を深く識り、「先祖が言うような、わやなナマダサ坊主ではない」と認識していたからこそ、「寺がなくとも、良寛は存在する」と、断定を下したのである。



寄居浜にある安吾碑

坂口安吾は昭和三十年(一九五五)三月十七日に急逝した。その直前、「安吾新日本風土記」の取材旅行で高知を訪れた。三月十日に東京戸岬。それから迂回して中村市、足

の始祖―神武天皇の伝説』(風間書房・東京)は、在野の研究者として長いキャリアを持つ著者により、昭和五十二年出版の『記紀神話の研究』に続いて刊行されたもので、著者のライフワークといえます。

著者は古代中国の文献に対する深い造詣を背景に、記紀を丹念に読み込み、本居宣長、津田左右吉以来の諸研究者の説に広くあたり、それらへの批判検討の上に立ち、以下のような壮大な説を展開しています。それは「高天原からのいわゆる天孫降臨伝説やいくつかの宮中祭儀は、七世紀後期に中国古代の天命思想を原型として作り出されたものであるが、天上の最高神を皇祖とすることにより、中国流の易姓革命が予防され、皇統の連綿が保障された。神武伝説もこの文脈の上で理解すべきである」というもので、緻密かつ着実な論理の展開が高く評価されました。

最後まで、候補作品として残ったのは、戸崎敬子氏著『特別学級史研究―大戦前の特別学級の実態』(多賀出版)と池谷寿夫氏著『セクシュアリティと性教育』(青木書店)の二編ですが、このほかにも注目すべき著作が何点もあり、本県の学術出版活動も着実に発展していることがうかがわれました。

(高知大学長)

摺岬を経巡って、三月十五日に桐生市の自宅へ帰った翌々日に急死した。脳出血。

ところで、めったに帰郷しなかった安吾は、亡くなる二カ月前に、「富山の薬と越後の毒消し」(「安吾新日本風土記」連載第二回)の取材で帰郷して、毒消しの里の角田村、そして岩室村、地藏堂(現在の分水町)、巻町を訪ねた。このときの見聞を、

「毒消し売りの女たちが、一様に青春のすべてを毒消しにつぶして平然としている。それはまた、蒲原芸者のあつげらんとした境地と通じたものがあるかもしれない」と記して、最後を次の文章でしめくくっている。

ここまでくると、もはや俗物には見当がつかないと云ふべきかも知れない。
良寛さま曰く
天上
大風
である。

坂口安吾が若いころに、好んで策したといわれる新潟市寄居浜海岸に、作家尾崎士郎の書でかれの詩碑が建っている。

ふるさとは語ることなし 安吾 (随想家)

南の国の友人たち

可知 文恵

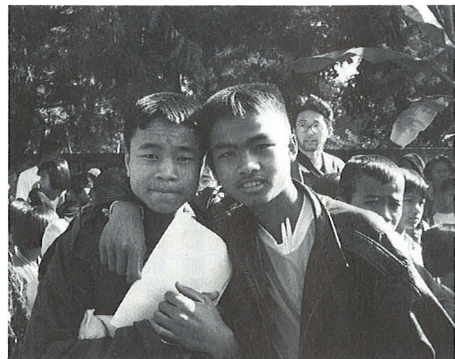
遙か南のタイ国に、日本人によって、私の手で、次々と色々な施設が出来上っていく。そして、現地に沢山の友人の輪が広がる。こんな夢のような話が現実であることに、我ながら不思議な気がしてならない。

ワークキャンプもさることながら、私が一番楽しみにしているのは、前に行った学校や、ホスト・ファミリーの家を訪問して、先生方や生徒・家族と再会することである。キャンプ期間が短いため、行き帰りの途上に立ち寄りながらの訪問なので、二、三十分程度だが、タイ人たちも目を潤ませて、私たちとの再会を喜び合

う。タイ人はタイ語、私は日本語と簡単な英語、そして少しばかりのタイ語なので、なかなか話は通じない。学校の先生の中には英語を話す人がいるので通訳をもらうが、お互いに変な発音なので四苦八苦することも。遂にはノートを出しての筆談。

この方が分かりが早い。私たちは帰国すると、写真に手紙(英語)を添えて送る。しかし、返事は来ない。届いたのか、届かないのか。それは次に行った時に確かめるしかない。私の手紙は六回中三回しか届いていなかった。写真を送ると言っていたので、嘘を吐いているようで何だか悪い。さもありなんと、この頃では余分に焼いて写真を持参するようにしている。

四回目のウッアローンム家へ再訪した時、写真は届いたか聞いたが届いていないようだった。娘のフイーンが出て来た写真の袋には日本人の名前が書いてあった。私と同行していた人のは届いていたのだ。帰国して、その人に貴女の写真は届いていたらよと知らせると、彼女は大変喜んだ。小学校宛に送ったのとどだった。公共施設や学校の先生、役人の家等は郵便のルートが整っているようだが、山間・僻地の民家には



ホワン君(左側)と友だち

までは駄目らしい。私は何とかして返事をもらいたいと思い、タイの絵ハガキにタイの切手をはって自分の住所を書き、写真が届いたらそのことを書いてポストに入れてほしいと頼んだ。しかし、ハガキは来なかった。次に行った時に、そのハガキを見せて欲しいと言ったら、大切にしまっていたようで、私の頼みは全く通じていなかったのである。

ところが、今年(一九九四年)の一月二十五日、待ちに待った手紙が来た。昨年の十二月に行ったボールアンスクール、中学二年生のホワン君からだ。彼は大変な勉強家で、いつもノートを片手に、暇を見つけては私の所に来て、日本語を教えて欲しいと頼む。私はあまりの熱心さに

打たれ、ちょうど持参していた子ども用の「あいいうえお帳」を彼に与え、五十音の読み方を教えた。彼は覚えた日本語を文字表から拾って書き、翌日、私に見せて、これで良いか聞く。私が頷くと、彼は両手を自分の胸に当てて、どきどきするほど嬉し

いと喜んだ。彼の手紙には、私の親切に感謝し、将来、日本へ行くのが夢だと英語で書いてあった。私は彼らの写真とともに、君なら実現出来ると励ましの手紙を添えて出した。

キャンプ最後の夜はカントーク・ダイナー(送別会)が開かれる。この席上でのチェンマイ郡の郡長さんの挨拶が印象に残った。「遠い日本からタイへまで来て、学校建設をしていただいて大変感謝する。第二次大戦の時、タイは日本にひどい仕打ちを受けた。でも、それは昔のこと。敗戦後、日本は素晴らしい発展を遂げた。私の家庭では扇風機、冷蔵庫、テレビ、車など、日本製品を愛用している。私は日本の皆さんに会ってさらに、日本が好きになった」。これは客に対する儀礼的な言葉であるにしても、私には経済の急成長を遂げているタイ国の余裕が感じられた。そして、地味な活動ではあるが、このような草の根の国際交流・貢献の必要性を痛感した。 一完 (タイ・ワークキャンプ協力員)

ガラスの四季

岡林 隆雄



第一回高知大丸個展

雪が降っている。竹林の緑が見える雪の向こうに、消えていく。高知市の北の外れ、重倉で仕事をする事となってから、生活の中の雪を楽しむことが出来るようになった。帰郷した当初、「日本とガラスって合わないのでは？」と訝る人達に、「竹取物語に出てくる車持皇子が、かぐや姫に差し出した蓬莱山の玉の枝、あれガラスだったんですよね、素材としてのガラスは、古くからあったんですよ」と、よく話していたのだが。緑なのだろうか、竹林のまん中にガラス・スタジオを建てることになった。ちょうど平成元年、スタジオは大枠で完成し、創作活動に入った。しかし、まず夢中になったのは当然のことのように、筍掘りであった。地区の一番の掘り手であったという年配の方から、手解きを受け、地下茎一本立ち切ることに、竹を掘り出せることを知り、また土から掘り出されたばかりの、みずみずしい筍の美しさに驚いた。こうした感動は、素直に形として表れる。平成二年の高知大丸の第一回個展に出品し、以降定番となった斑点文グイ呑はこの時のものである。

私の仕事は、ガラスを溶かし、水あめ状になったものを、中空の棒の先に巻きつけ、膨らまし、形を造っていく。宙吹きと呼ばれるものが主となっている。この溶けたガラスを扱うせいであろうか、ガラスに対するイメージが、冷たいとか、堅いというものでなく、むしろ遠い昔、駄菓子屋の店先に並んでいた、ゼリーのお菓子のイメージがある。事実、ガラスの蓋物には、金平糖がよく似合う。

私のものから受けるインスピレーションは童話であって欲しい、子どものあるこころ見た夢を想い出させるものであって欲しい、そう願っている。そんな私にとって、筍を掘り、畑仕事をし、木を切り、薪を作る、これらのことは、大きな力となる。

竹林が、向こうの方で風に出合い、音を立てて、こちらに呼びかけてくる。この風が見えるという感覚。

草刈りをすれば、様々な生物が、その中から飛び出してくる。自然陶汰された、その形や色に驚く。

この毎日の感動と驚きは、無意識のうちに制作への糧となる。

ただ、夏の台風には参った。街育ちであった私は、風の通る道というものがあることを知らなかった。

スタジオを建てた時、「ここは日

当たりもえいが、風当たりもえいぜー」と、脅かされていたのだが、さっそくその年、台風に遭い、周りの杉や松が何本も倒れ、えらい目があった。困っていると、忠告してくれた本人が現れ、木を切って道を開け、こんなことは十年に一回だからと、慰めて帰った。人情である。

代々、この土地で暮らしてきた人達の家には、台風対策の工夫がなされている。これも風土のなせる業なのだろう、と思いつつ、もっと早く教わっておけば良かったと思う。これから、徐々に工夫していくしかない。こんな事情もあり、秋になればホッと一息つく。もちろん、ガラスを溶かす熱い仕事柄、少しでも涼しい方が良いということは第一にあるのだが。

そして、十一月には定例となった新作展が、高知でじゅんまりと開かれる。主に県外での企画展を多くこなすため、年に一度のこの企画は、久し振りで知人に会える良い場となっている。

まっ白な雪景色の中、寒中梅の赤がぼんやり見える。この冬が終わり、山が桜で賑わいを見せるころ、神戸や大阪、関西を中心としての企画展が集中している。今年も、忙しい年になりそうである。

(ガラス工芸作家)

『宮尾登美子全集』

宮尾登美子さんの全集十五巻が今年の一月一日に出揃った。朝日新聞社が平成四年十一月一日に第一巻を発行、以来毎月一巻ずつ発行して『宮尾登美子全集』全十五巻が完結したものだ。朝日新聞社としても個人全集を出すのは久々のことだといいい、出版界からみても作家が現役で活躍中にその全集が出版されるのはもっと珍しいとも聞く。

その珍しいことを、わが高知県出身作家、宮尾登美子さんが成し遂げたというべきか、成し遂げさせたというべきか、ともかく宮尾さんの全集が出たのだから、まことに喜ばしい。嬉しくて吹聴したくなる。

『宮尾登美子全集』は、装画 中村岳陵「豊幡雲」部分、扉画 中島千波、装幀 中島かほる、だけに豪華で気品がある。外箱の「豊幡雲」に感嘆し、本を取り出してまた感嘆。

上品そのものである。淡い鶯色一色で布地は光沢があり、椿の押し絵と金色の背文字がよく映えている。

宮尾さんの作品は太宰治賞を受賞した『權』をはじめ、出版され入手する度に一気に読了してきた。一気に読ませる作品の力、宮尾さんの力を、その都度痛感した。トレードマークのように現れる「観念する」という言葉に出合っては宮尾さんの心を思いはかり、高知をテーマにした作品では粗野でなく美しく効果的な高知弁の使い方に感心した。

全集の各巻に月報が付いていて、月報1には丸谷才一氏の『權』の時評が再録されている。その中で丸谷氏は「方言やオノトピア（擬声語、擬態語）が地の文のなかでさへしきりに用ゐられ、しかもいささかも乱雑な感じを与へず、むしろ適切な効果をあげてゐる」と評している。



太宰治賞選者の一人、白井吉見氏は『權』について同じ月報1に「僕は愛読し敬服した。一行一句、作者の感受性できびしくえらびとられていて、世間通用の、まして借りものもの言いなどこにも見当らない。小説でなければ得られないおもしろさ、楽しさをたっぷり味わわせてもらった気がする。」と書いている。

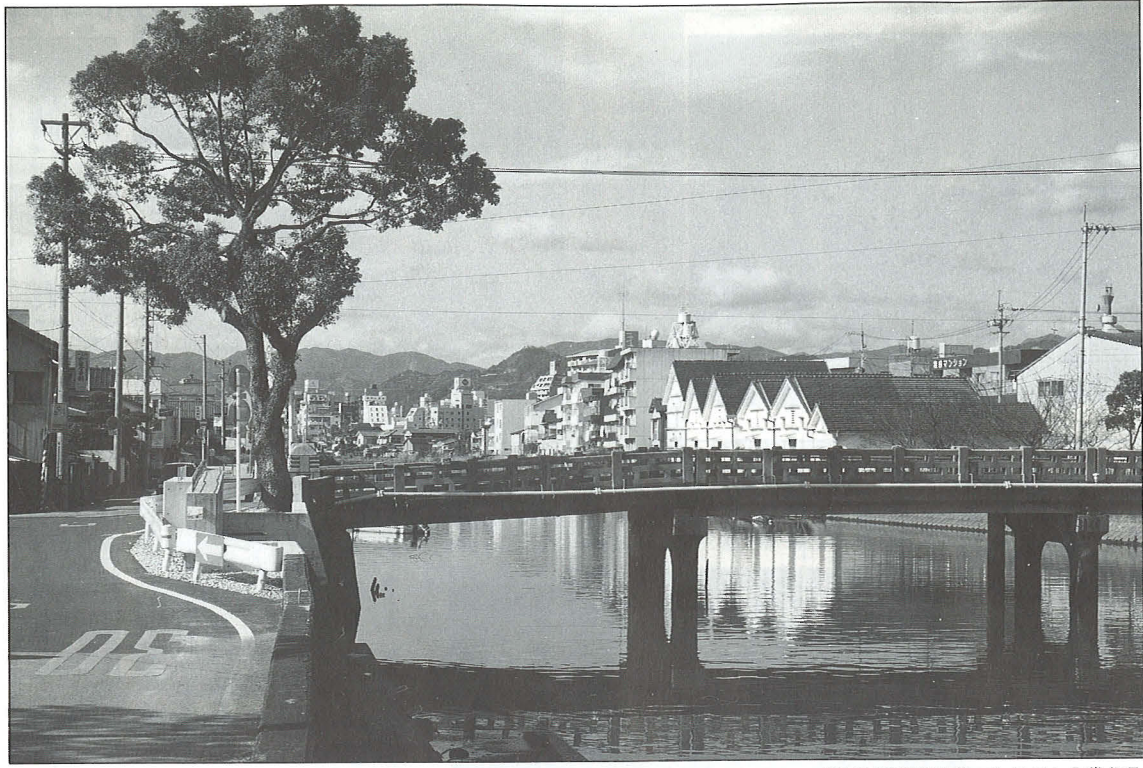
宮尾さんは書くことと同じように話すことも大好きだし、それが宮尾作品の根っこになっていると私は思っている。高橋英夫氏は月報13で『權』の受賞パーティの時、宮尾さんの話が長かったことについて「胸中に累積していた長い熱い思いをえんえんと語らずにはいられない状態になっていたのだから。二十年たつてみて、宮尾氏の小説作品が、思いのたけを語りた、語り続けたいという作者の動機によって基本的に

支えられているものであることが見えてきた気がする。そこには語ることに託した生命の燃焼というものがある。」と書いている。

また月報14の渡辺淳一氏は「宮尾さんの話はいつも楽しい。それはいつも人間的で、下世話で、生々しく」と書いている。講演会で一緒にあったことのある中野孝次氏は月報2で、自分の話が一般的抽象的なテーマになりがちであるのに対し「宮尾登美子さんは人前で話すときでも具体的に、自分の最も関心のある自分自身の話をする。根っからの小説家なのである。」と述べている。

さらに特筆すべきは、この全集には宮尾さんの未公開の日記があること。とびとびながら高知在住の昭和二十二年から掲載されているし、上京後の日記にも高知の誰かが登場する。月報15で佐伯彰一氏は「『日記』といっても、じつはそっけない事務的なメモ、即物的な記録の連続ではないかと思った。ところが：書き手の哀歎、喜怒哀楽がかなり率直に書き現わされている：作家以前の動揺、悩みがナマナマしく露呈：『公開』の飾らぬ勇気を讃えずにはいられない：全集の最終巻にふさわしい贈り物：」と書いている。

『宮尾登美子全集』のご愛読を。
(英保 迪恵)



第10回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

一文橋界限 筒井 啓介

長い伝統をもつ日本型食生活が、ここ三十年ほどの間に大きく変化した。米食離れが言われるように、若い世代を中心に洋食派が和食派を凌ぎかねない食構造の変化がそれであり、加工食品や惣菜などの調理済み食品の利用が増えたことも見逃せない。外食の機会も格段に多くなつて、

発達と流通の整備、核家族化と共働き家庭の急増などがあり、また電気冷蔵庫や電子レンジなど家庭電化製品の普及もその受け皿になっている。そしてこうしたことが、女性を家事から解放したことは評価されている。わが国では、農耕社会が生まれて以来、ずっと食事の準備は、家庭の中で主に女性の重要な役割とされてきたが、いまはそれも昔語りになりつつある。

飽食時代？

風俗歳時記



手抜き食品の代名詞のように言われた即席ラーメンも、昭和三十三年に発売されると同時にひろがり、昭和四十六年には容器の中にお湯を注ぐだけで食べられるカップヌードルが開発され、昭和五十年にはノンフライラーメンができ、昭和五十年代半ばには朝食に登場するようになつて、いまでは年間に五十億食も売られているらしい。レトルト食品やレトルトパウチ食品も一般化し、テレビディナー（テレビを見ながら食べられる料理であると同時に、加熱中もテレビを見ていることから命名）まで登場した。

気掛かりなのは家庭料理の痩せ細りである。ことに朝食の場合の手抜きが目につく。たとえば子どもたちをとりまく状況をみて、子どもが一人だけか、もしくは子どもだけの食事（孤食化）が多くなっているし、食卓の料理の数もカップメンだけとかドーナツとジュースといった具合だ。中には朝食抜きで登校する児童さえいる。飽食時代の大きなひずみと言いたいのが、いま「なにを食べるか」とともに、「どのように食べるか」を含めて、じつくり「食」のあり方を考えることが重要になつてきているのではないか。
(晋)

古典音楽 リサイタル

17.18世紀のガンバ音楽

Music for Viols

Program

- H.パーセル ■ 3声のファンタジア
- M.ロック ■ 組曲第5番 イ短調—長調
- J.ジェンキンス ■ 3声のデイヴィジョン イ短調
- C.シャフラット ■ デュエット ニ短調
- J.S.バッハ ■ フランス組曲 第2番 ハ短調
- M.マレ ■ 3つのガンバのための組曲 ト長調
- 他

Viola da gamba

上村かおり
中野 哲也
福沢 宏

Cembalo

小島 芳子

1994年 6月7日(火) 午後6時30分開場
午後7時開演

会場：高知市立自由民権記念館 アトリウム

入場料：2,500円（高校生以下 1,500円）

- お問い合わせ・電話予約 (財)高知市文化振興事業団 ☎0888-73-4365
- 主催：(財)高知市文化振興事業団・高知市立自由民権記念館 ■協力：高知古典音楽を聴く会
- チケット販売：文化振興事業団・自由民権記念館・高新プレイガイド・チケットセゾン・チケットピア

「地の会」十周年記念高知展

七人の鬼才たち

静かなる魂の声

■平成6年6月29日(水)～7月10日(日)

■高知県立美術館・県民ギャラリー

※午前9時～午後5時（入場午後4時30分まで）月曜休館

■一般五〇〇円（高校生以下無料）

主催「地の会」展実行委員会・高知県教育委員会・高知市文化振興事業団

〈出品作家〉

池田幹雄

上野泰郎

大森運夫

小嶋悠司

滝沢具幸

毛利武彦

渡辺 学

一九八四年四月、現代日本画壇に重厚な足跡をしめしてきた創画会所属の画家七名の手によって、制作小集団「地の会」が結成されました。以来、毎年東京銀座・資生堂ギャラリーにおいて発表を重ね、一九九四年に十回展を迎えます。その間、常に新しい方向性と造形を追求してきた堅固な制作姿勢は、現代美術界における多くの識者の評価を得ています。

この展覧会は長野県と高知県の全国二カ所のみで開催であり、ぜひこの機会に日本画の地平を見つめてきた気鋭のグループの十年のあゆみをご覧ください。

※チケットは市内主要プレイガイドおよび高知市文化振興事業団で5月9日(月)より発売します。